丁種本《西番譯語》（川二）《象鼻高山譯語》に記録される チベット系言語の性質について*

鈴木博之

摘要　清乾隆时期编纂的丁种本《西番译语》共九种中，所谓的《象鼻高山译语》（川二）的研究极少。本文根据前人提出过的《象鼻高山译语》中记录语言的特征，通过最新的藏语支语言的看法及资料，再次梳理其特征。研究指出《象鼻高山译语》里记录的语言为藏语支语言之一，应属于东部组，与白马语有着联系但不确定有两者之间的亲属关系。

キーワード　丁種本西番譯語　チベット系諸言語　言語所属　西南官話

1. はじめに

本稿は、《華夷譯語》のうち丁種本《西番譯語》（1748 年編纂；春花 2020 参照）の「川二」と分類される、通称《象鼻高山譯語》について、西田・孫（1990）の研究をもとに、最新のチベット系諸言語（Tibetic[1]）の研究成果を踏まえ、その言語特徴についてさらに分析を深めることを目的とする。本来文献言語学的研究において必要な作業である校本の作成や、記録される言語の体系的な分析は行わない。筆者の手元にある資料を中心に、今後の研究に向けて現状で到達できる考察を提供することに主眼を置く。

丁種本《西番譯語》については、冯（1981）の報告によって全 9 種の存在が知られることになった。その一部については日本に抄本が存在し、それを対象にした研究がある（西田 1970, 1973、松川・三宅 2015）。丁種本《西番譯語》に記録された言語自体の研究は、丙種本を対象とする西田（1963）および乙・丙・丁種本を対象とする西田（1970）の研究を踏まえて、西田（1973）によって体系的なアプローチが確立したといえる。丁種本については、西田・孫（1990）が当時の得られうる資料で最も詳細な分析を行い、かつ北京大学図書館蔵抄本の影印を提供している。ただし、当時の資料には制約があり、分析の不手際が認められる。特に記録される言語の音を記した漢字音を現代北京音で読んでいる（西田・孫 1990：7–8）ため、その再構音は現実と乖離した面が認められる。

一方、音形式の再構の精度は、後の研究によって徐々に高められてきている。特に、記録された言語の後裔に当たる諸言語をフィールドワークで直接記録できるようになって以降、新たなアプローチとして、現代の口語形式から出発する研究方法が現れた。それをはじめて実践したのが、西田・孫（1990）の川四《白馬譯語》のペマ語研究である。また、詳細な検証が必要であるものの、漢字音を現代の西南官話を基本として読むという手続きを採用することで、先行研究における再構音に認められた多くの疑問点が解消されている。これらの方法を用いて、これまでに表 1 のような成果が出ている。

* 本稿は 2023-2025 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「移住と言語接触を視野に入れた漢語全時代形成史の歴史地理言語学的研究」（研究代表者：遠藤光暁、課題番号 23H00625）の成果の一部である。

[1] Tibetic という用語の定義は Tournadre（2014）に従う。詳細については、Tournadre and Suzuki（2023）も参照。

表 1 丁種本《西番譯語》についての現代語を用いた研究成果の例

番号	通称	記録言語	該当する先行研究
川一	《松潘譯語》	ヒャルチベット語	鈴木（2007a）
川三	《嘉絨譯語》	ギャロン語	池田（2013, 2014）、王（2021a, b）
川四	《白馬譯語》	ペマ語（チベット系）	西田・孫（1990）、孙 等（2007）
川五	《呂蘇譯語》	リュズ語	池田（2019, 2023）
川六	《木坪譯語》	カムチベット語二十四村方言群	鈴木（2007a, b）
川七	《打箭爐譯語》	カムチベット語木雅熱崗方言群	鈴木（2007a, 2009b）、铃木（2015）、达瓦卓玛（2022）
川八	《多續譯語》	ドス語	西田（1973）、Chirkova（2014）
川九	《木里譯語》	カムチベット語（方言群未確定）	鈴木（2007a, c）

しかしながら、川二に対する先行研究は見当たらない。表１の研究が成立するには、記録されたと目される地域で話される民族言語の資料が必要とされる。ところが、川二に記録される言語の後裔が今なお話されているのかという点について、筆者は未確認であり、先行研究にも記述研究は見当たらない[2]。しかし、関連資料の記載に基づいて考察を進めることは可能であり、その作業を通して今後のフィールドワークの必要性も見えてくるといえる。

本稿では、２節で関連資料の記載についてまとめ、現段階でのチベット系諸言語の知見をもとに、より詳細な言語事情を議論する。つづく３節では、西田・孫（1990）が指摘した《象鼻高山譯語》の特徴について、資料のある周辺に分布するチベット系諸言語の特徴と対照し、地理言語学的視点からより精緻な考察を行う。

2.《象鼻高山譯語》記録地点における現代の言語状況

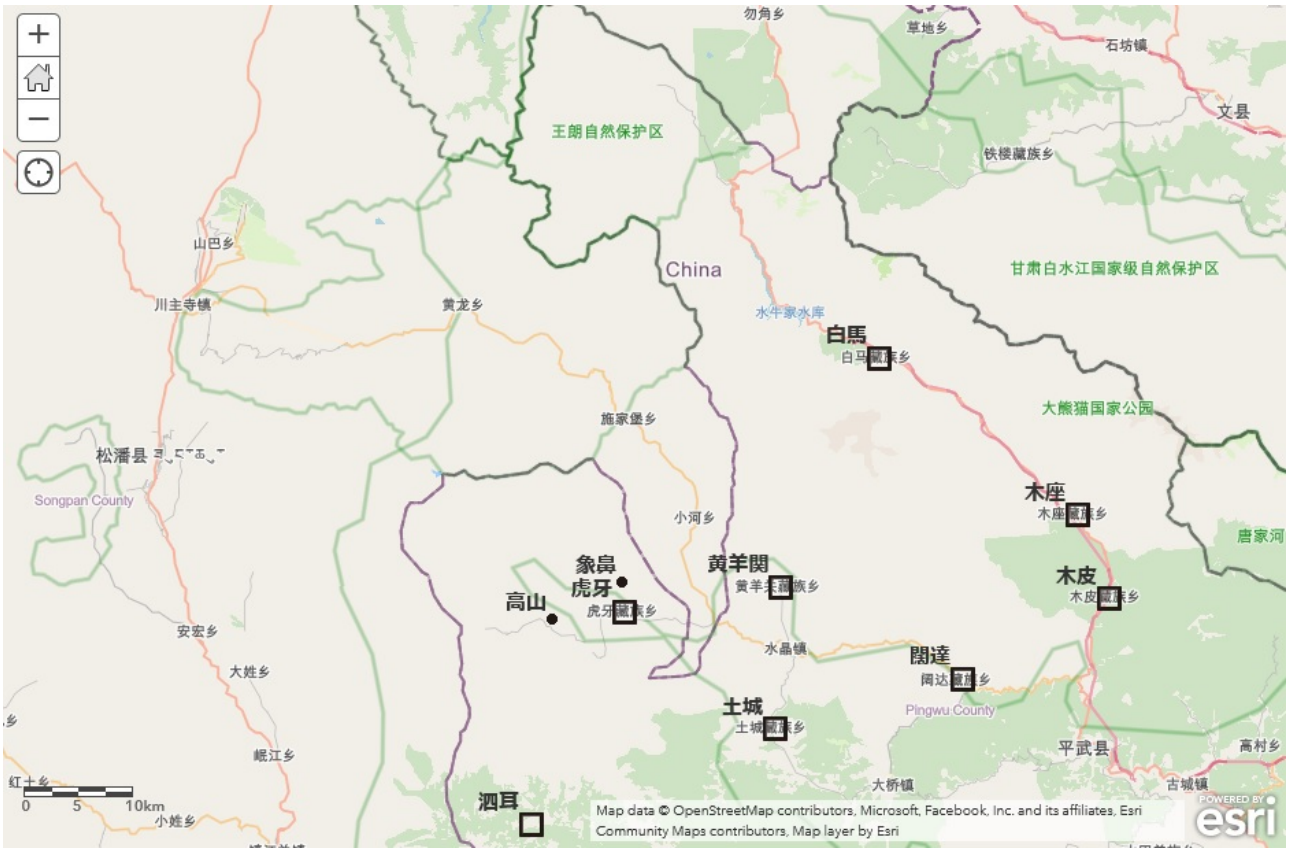
《象鼻高山譯語》に記録される言語が何であるかは、西田・孫（1990）によれば、チベット語アムド農民方言ではないかと考えられる一方、記録される形式の音特徴からペマ語に近いと言及があるのみで、それ以降新しい見解は発表されていない。前者の見方は中国のチベット系諸言語の分類を反映しているが、Tournadre（2014）で分類の大枠を変更する案が示され、Tournadre and Suzuki（2023）でその区画の詳細を明らかにした。そこで提示された地域分布を踏まえると、《象鼻高山譯語》が話されている地域は、チベット系諸言語の「東部（Eastern）」に分類され、「東北部（North-eastern）」に属するアムド方言（著者の用語ではアムドチベット語）とは切り離されている。Tournadre and Suzuki（2023：500–506）に従うと、ペマ語もチベット系（Tibetic）であり、東部に属する言語の１つに数えられる。

さて、《象鼻高山譯語》にある序文[3]に示される地域において、記録された言語が通用していたと考えると、「象鼻（寨）」と「高山（寨）」と呼ばれる集落で話されていた言語と考えてよい。これらに相当する集落は、現在の四川省綿陽市平武県虎牙藏族鄉にある。平武県には８つの藏族鄉があり、虎牙鄉のほか、その南に位置する泗耳藏族鄉、東に位置する黄羊関藏族鄉、土城藏族鄉、闊達藏族鄉、さらに北に木皮藏族鄉、木座藏族鄉、白馬藏族鄉が認められる（図１参照）。このうち、最後の３つはペマ語の分布域（白馬路）となるが、それ以外の鄉のついては、現在のところ記述言語学的研究がなく、民族言語

[2] ただし、曾（1993）や刘（2006）は、川二の記録地点周辺で、その時点でチベット系言語が話されていたことを報告している。

[3] 北京大学図書館本における川二の序文（西田・孫 1990：11）は次の通り：
「四川松潘鎮 松茂道 龍安營 龍安府 各所轄土知事薛維綱所管象鼻高山西番即吐番字語照依奉頒字書門類次序譯繕如左」

が保持されているかどうかも不明である。ペマ語分布域を除く郷について、曽（1993, 1997）がそれぞれ虎牙郷と泗耳郷[4]の民族誌的記述を行っており、同地の民族言語の認識や住民の祖先についての言及がある。



注：□によって各藏族郷の位置を示す。「象鼻」及び「高山」の２地点は、虎牙郷に属し、•で示す。
図 1 平武県の藏族郷及びその周辺

虎牙郷についての記録である曽（1993）の記述を参照し、同地域のチベット人居住者に関する点を、以下にまとめる。

まず、自称と他称についてみると（曽 1993：107–108）、表２のように整理できる。曽（1993）は民族語音の漢字音写のみ記載しているため、表２には音写のもとになったであろう音形式に対応するチベット文語（以下「藏文」）形式[5]を推定し、それについて解釈可能な意味も添える。

[4] 曽（1997）では、泗耳は現地人の希望に従い色尔と書くべきとする。ただし、行政単位の名称としては泗耳と書くため、本稿では泗耳を用いる。

[5] 本稿における藏文形式は、de Nebesky-Wojkowitz（1956）によるローマ字転写で示す。ただし古チベット語のつづりも含みうる。また、対応する文語形式が存在しない場合も、語源と音対応を考慮して仮の文語つづりを与える。

表 2 虎牙郷のチベット人の自称と他称

対象（A > B；A 人の B 人に対する呼称）	曾（1993）の漢字表記	曾（1993）の漢字表記から推定した蔵文形式	蔵文形式に対する意味
虎牙-自称	毕捏	bod myi	チベットの人
虎牙-自称	白	bod	チベット人
虎牙 > 松潘	白扼	bod myi	チベットの人
松潘 > 虎牙	甲拉六	rgya kla klo（？）	特異な漢人
虎牙 > 泗耳	俄堆 俄多尼扼	mgo stod mgo stod 'dug myi	標高の高い土地 標高の高い土地に住む人
虎牙 > 泗耳寨	赊	ser（曾 1997 による）	土石流の地
泗耳 > 虎牙	壳布	khong po	コンボ（地名）
虎牙 > 白馬	夺补	dwags po	ダクポ（地名）
虎牙 > 黄羊関	贡皮	dgo ba pa'i（？）	黄羊（翻訳借用）の人

表２の状況を見ると、虎牙郷のチベット人は自身がチベット人であるという意識を持ち、西の松潘県、南の泗耳郷、北東の白馬郷のチベット人とみなして、チベット名・チベット語名で呼称するが、松潘県のチベット人から見て虎牙郷のチベット人を漢族、少なくとも非チベット人と考えているふしがある。この「甲拉六」という呼称の意味について、曾（1993：30）では「松潘のチベット人と異なり、現地人が頭の上に鶏の羽を差している地方」との記載がある。確かに、ペマ語の分布地域や九寨溝風景区内外の村々（漳扎鎮）のチベット族には、帽子に羽を差すという服飾の習慣がある（西田・孫 1990 の口絵、魏 2019：57–60 の写真を参照）。松潘県のチベット系諸言語の資料から推定した蔵文形式 rgya kla klo はこの解説とは一致するものではないが、「[頭の上に鶏の羽を差すという]特異な（kla klo）[風習を持つ]非チベット人（rgya）」という含意を示唆するものである。

松潘県のチベット人がいう「甲拉六」は、白馬郷のチベット人に対しても用いる。しかしながら、白馬郷のチベット人を特定的にいう語があり、それは虎牙郷のチベット人が白馬郷のチベット人を指す「夺补」と同様の音からなる。これは蔵文 dwags po と関連していると考えられ、白馬郷のチベット人の祖先がダクポ（現在のチベット自治区山南市東部周辺）から来たと理解される[6]。

これと並行する名称に、泗耳郷のチベット人が虎牙郷のチベット人を指す「壳布」がある。これには蔵文 khong po（正則のつづりは kong po）との対応関係が見出せる。祖先がコンボから来たという意味で理解するならば、現在のチベット自治区林芝市あたりを指すものと考えられるが、泗耳郷のチベット人がそのような過去の事情を把握しているのは不自然である。より可能性があるのは、九寨溝風景区のチベット語名である khod po khog から来た人という意味で理解することである。khod po は当地の発音を反映した新しいつづりで、本来は khong po としなければ九寨溝のチベット系諸言語の音対応に合わず[7]、加えて九寨溝の民間伝承によれば、九寨溝のチベット人の祖先はコンボから来たと語られている。

[6] 桑木旦（2002）参照。一方、魏（2019：2）は「夺补」をペマ語話者の居住地に流れる川の名称によるものと解釈し、ダクポとの関連には触れていない。

[7] Khodpokhog チベット語をはじめ、ペマ語にも見られる音対応として、蔵文で無声有気音字に m または'が先行する形式が前鼻音を伴う有声音と対応関係を見せる（鈴木 2008）。この中で、たとえば khang ba「家」は/ᵑgɔ/と対応する。これは khang の末尾鼻音字が先行子音の前鼻音化する、すなわち'khang のような語形が推定できる形式と分析される。同様に Khodpokhog チベット語において「九寨溝人」を意味する/ᵑgo po/という形式は、直接的には'khong po と対応し、それは khong po に由来すると考えて問題ない。

しかしながら、虎牙郷のチベット人の来歴については、九寨溝とは関係がないようである。曽（1993：73–99）によると、複数の家系が松潘県の漳臘からの移民とする言い伝えがあることを記している。漳臘とは、現在の松潘県川主寺鎮、山巴郷、水晶郷一帯を指す。そこはヒャルチベット語[8]の分布域であり（鈴木 2007a, 2008）、また九寨溝風景区のチベット系言語（Khodpokhog [九寨溝]チベット語）とともにまとめて扱われることもある（Suzuki 2008, 2009）が、互いに意思疎通が困難なほどの差異がある。Khodpokhog チベット語の特徴はペマ語と共通する点が複数あるが、ペマ語話者との相互理解度は低い（鈴木 2008、铃木 2013）。

以上のように、虎牙郷のチベット人による来歴の口承は khong po との関連を示唆する点はないが、18 世紀の漳臘周辺の言語状況は川一《松潘譯語》に反映されていると推定するのが合理的である（鈴木 2007a）。一方で、川一と川二は西田・孫（1990）の研究から相似しないものと理解できるため、言語学上は互いの親縁関係を認めることはできない。祖先を同じくしても、移住や代替わりを経て言語は変わりうるものであるが、そうであるならば、虎牙郷への移民が 18 世紀において既に数代経た場合や口承が事実を反映していないなどの事情が考えられる。

また、西田・孫（1990）は川二と川四《白馬譯語》の近似性を指摘している。一方で、現地のチベット人の見方に基づけば、虎牙郷と白馬郷に居住するチベット人の間には異なりがあるものと認めている。両者の間に関連があるとするならば、来歴を伝える口承の内容には疑問が残る。なお、丁種本《西番譯語》が作成された時期（1748 年ごろ）において、象鼻寨や高山寨を管轄する龍安土司は、管轄地域にいるチベット人（番人）を３種（白草寨[=現泗耳]、木瓜寨[=現虎牙]、白馬寨）に分けて認識している（曽 2000：432）。このうちの２か所が丁種本《西番譯語》の調査地に選定されていることから、調査地を選定する側から見れば、異なる言語が話されているものと考えていた可能性が高い。それが序文にも反映されていると見れば、川二と川四には一定以上の差異があったものと認識されていたと考えられる[9]。

加えて、現代の泗耳郷に居住する過半数のチベット人の祖先もまた松潘県からの移民である（曽 1997：229）。ただし、その出自は現在の松潘県鎮江關郷にある地域であり、この地域に分布するチベット系言語は Khromjekhog（牟尼溝）チベット語で、漳臘で話されるヒャルチベット語とは異なる言語と考えてよい。Khromjekhog チベット語の記述は、华、尕藏他（1997）にあるものが代表的であり、音体系を見ても、ヒャルチベット語（Suzuki 2008, 鈴木 2010）とは異なりがある。このことから、泗耳郷のチベット人と虎牙郷のチベット人の間には、少なくない言語上の差異があったであろうことがうかがえる。

図２は虎牙を中心とし、以上に出てきた地域と現代における言語区分を示した地図である[10]。ここに含まれる言語は、以上に言及したペマ語、ヒャルチベット語、Khodpokhog チベット語、Khromjekhog チベット語のほか、mBrugchu（舟曲）チベット語、dPalskyid（巴西）チベット語、Thewo-smad（下迭部）チベット語、Thewo-stod（上迭部）チベット語、Zhongu（熱霧溝）チベット語がある。分類の基準と各言語の特徴および名称は、

[8] 本稿でいう「ヒャルチベット語」とは、Tournadre and Suzuki（2023）における東部グループの Sharkhog 方言群に限定した呼称である。

[9] 一方で、川一や川七の序文のように、およそ１つの変種が分布していたとは思えない広大な地域の地名を列挙したものもある。しかしながら、序文に狭い地域のみを記している川四や川六のようなものについては、その通用する範囲を正確に記載したものと判断できる。

[10] 現段階では虎牙に分布するチベット系諸言語の所属は不明である。このため、地図上の記号については他と独立した形態を採用する。なお、泗耳以南は非チベット系諸言語（漢語、羌語など）の分布地域である。

上に記した文献、鈴木（2007d, 2013, 2022）および Tournadre and Suzuki（2023）に基づく。表示する地点は、筆者による調査で記録したものとともに、３節で改めて言及する先行研究にあるものも含む。より詳細な分布図については、Tournadre and Suzuki（2023）に付される地図を参照。

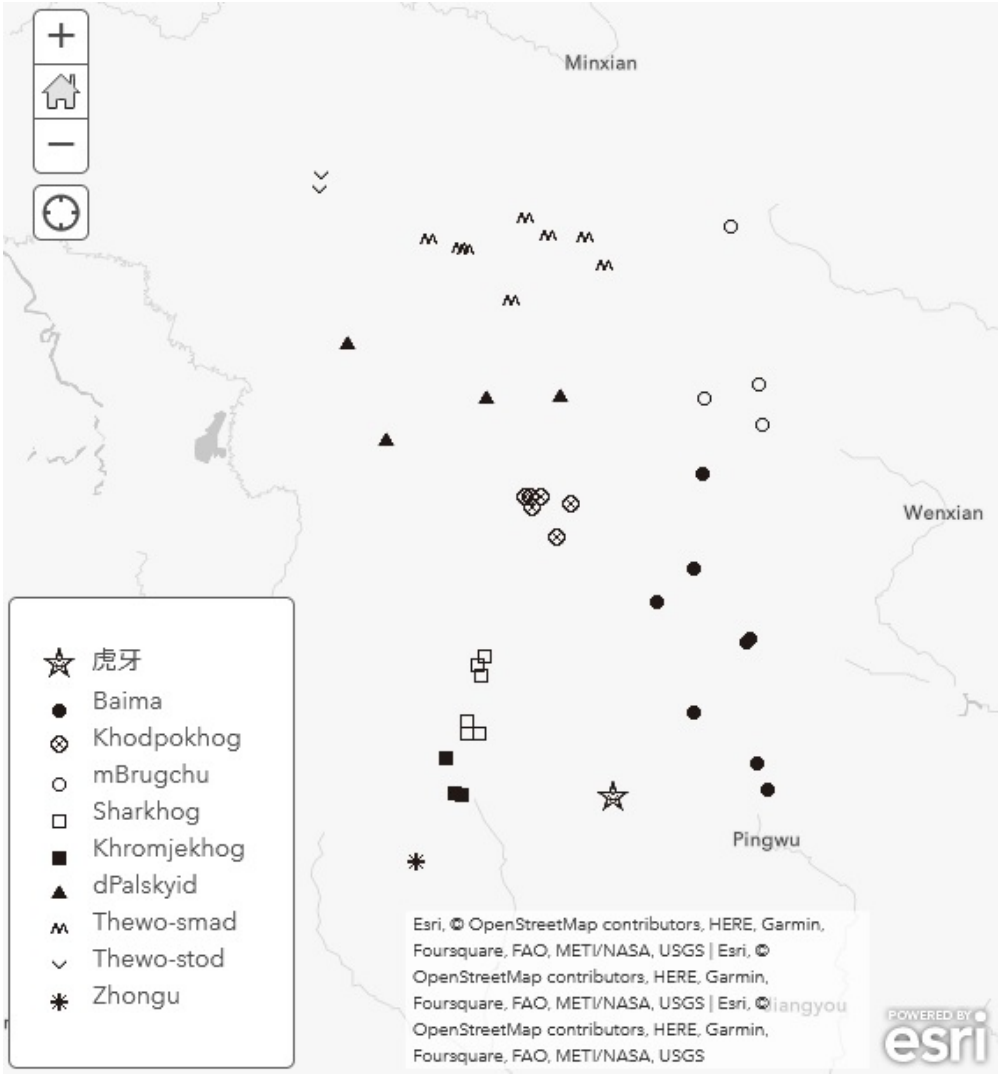


図 2 平武県および隣接地域に分布するチベット系諸言語の分類

以上、《象鼻高山譯語》に記録された言語のおかれた背景を見てきた。この中には、検証の困難なさまざまな問題が含まれていることが分かる。続く３節では、《象鼻高山譯語》に記録される言語の特徴を、現在のチベット言語学の知見および地理言語学の方法論からより詳細に分析することで、議論の突破口を示していく。

3.《象鼻高山譯語》に記録される言語が示す特徴

本稿で扱う《象鼻高山譯語》の資料は、西田・孫（1990）に付される北京大学図書館藍色本の影印に基づく。《象鼻高山譯語》の原資料は、このほか故宮博物院に収蔵される

抄本（故宮本；表題は《川番譯語》）が知られている[11]。これについては影印が出版され、参照できる状況にある（张 主编 2017）。必要に応じて故宮本も参照し、異同がある場合は故宮本の形式を採用した[12]。加えて、西田・孫（1990：27–29）によると、今西本も存在する。ただし、筆者は未見である。

以上のように、複数の版が確認されるため、本来は北京大学図書館本と故宮本を用いて校本を作成する作業が必須である[13]。ただし、本稿はその手続きを踏まず、西田・孫（1990）が整理した特徴をもとに議論を展開する。なお、《象鼻高山譯語》の音写漢字は現代の西南官話（四川方言）を参考に推定する[14]。

以下に取り上げるのは、西田・孫（1990：26–27）が指摘した中の次の３点である。（１）l > /j/；（２）名詞に付加される蔵文 ngan；（３）音訳に添えられる蔵文 red。これらに加え、４点目としてチベット系諸言語全体を参照して特徴的な語形を取り上げる。これらについて、それぞれ違った視点から考察を進め、適宜関連する範囲を拡大して取り扱う。

3.1　蔵文 l に対応する口語音/j/

まず、西田・孫（1990：26）にある例「年」「手」「枝」を含め、蔵文 l を初頭子音含む形式を表３にまとめる。

表 3　《象鼻高山譯語》における蔵文 l 対応形式

《象鼻高山譯語》			推定音形式
漢語見出し	蔵文形式	漢字音写	蔵文 l 対応部分
年	lo cig red	約子里	*j
手	lag pa re	押巴里	*j
枝	lo kyo	欲却	*j
葉	rna lo	納欲	*j
道	lam re	獄里	*j
糧	lo ko re	欲各里	*j
槍	lo chung red	老出里	*l/*^{N}d
笛	li the	力梯	*l
五穀	lus la	盧那	*l

注：「槍」に対応する形式を、記録にある蔵文形式に基づいて理解することは困難である。本来蔵文は mdung chung「短い槍」ではないかと推定する。この場合、記録された漢字音写形式の初頭子音は前鼻音つきの*^{N}d を意図していると理解する。音写漢字で/l/と/n/が合流する現象が認められ、かつ前鼻音を伴う/^{n}d/または/^{n}ɖ/が１声母の漢字で音写される並行例は、《象鼻高山譯語》内にも見つかる。

蔵文 l が主たる初頭子音となる場合、多くのチベット系諸言語では/l/が対応する（Tournadre and Suzuki 2023）。ところが、表３のように、蔵文 l には/j/に対応すると考えなければ説明のつかない事例が認められる。また、《象鼻高山譯語》の項目で、当該民族語が存在しない箇所には、漢語音がそのまま音写として記録されているものがある（たとえば、漢語見出し「臨洮」（地名）に対し、蔵文形式 lin tho など）。この場合、漢語の/l/声母に蔵文 l を当てていることから、記録者には蔵文 l は/l/と発音するという知識があ

[11] 筆者は 2008 年に故宮博物院にて故宮本《川番譯語》９種を閲覧した。
[12] なお、故宮本《川番譯語》９種に《草地譯語》を加えた 10 種の「校本」が聂、孙（2010）として出版されている。ただし、同書は校本の手続きが故宮本の活字化に近い整理となっている。上述のように、現在では原本の影印に当たることが可能である。
[13] 川一について太田（2008）が校本（稿）を提出しているほかは、丁種本《西番譯語》の校訂本は未見である。
[14] 丁種本《西番譯語》の成書年代ごろの四川漢語の音を記録した《五音集字》のような文献もある（霍 2023 参照）ことから、より精密なアプローチにはこのような文献を参照することも考慮に入れられる。

ったものと考えられる。

さて、蔵文 l が/j/となるチベット系諸言語については、高い頻度で蔵文 y を初頭子音とするものが/j/以外の音に対応する事例が報告されている。両者の音対応には関連があると考えられるが、蔵文 l が/l/に対応する変種でも蔵文 y が/j/以外の音に対応することから、蔵文 l の対応関係によって蔵文 y の対応音が変化したという因果関係にはないものと考えられる（鈴木 2021）。この蔵文 y について、《象鼻高山譯語》に記録された言語では表 4 のような関係を認めることができる。

表 4 《象鼻高山譯語》における蔵文 y 対応形式

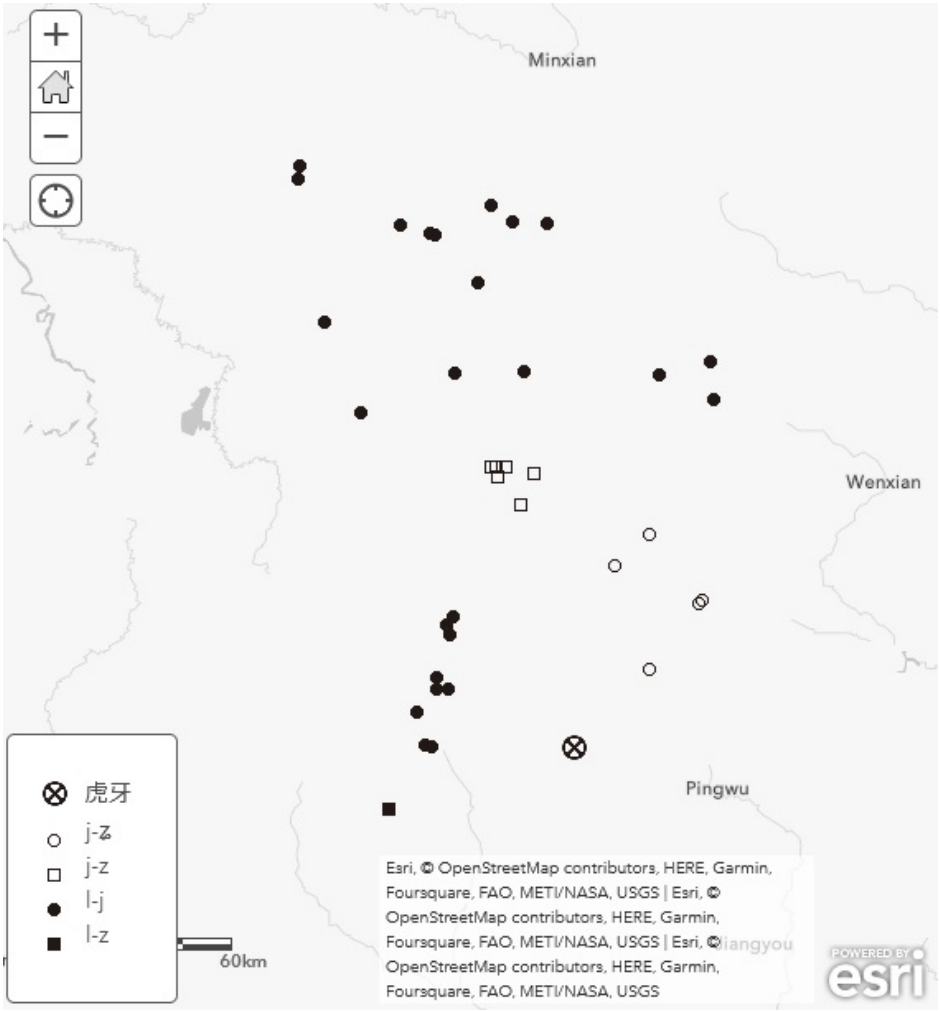
《象鼻高山譯語》			推定音形式
漢語見出し	蔵文形式	漢字音写	初頭子音の蔵文 y 対応部分
吏	yig mkhan red	戎堪里	*z/ʑ
高祖	yang gyi red	若宜里	*z/ʑ
叔	ya ku red	牙谷里	*j
書	yi ge	日哀	*z/ʑ
時	ye shu red	乙時里	*j
菜	ya ba	押哇	*j
歳	yi che red	也七里	*j
長	ya ring po	哈尼卜	*ɣ (?)
兄	ya ka red	呵哈	*ɣ (?)
殿	ya wang red	哈呵	*ɣ (?)

注：「歳」に対応する記録された音写形式は、「何歳であるか」という文だと推定する。このように考えると、本来蔵文は lo chi red となるべきであり、現象としては表 3 の蔵文 l 対応形式として扱う必要がある。また、この例によって、《象鼻高山譯語》に記録される言語では蔵文 l は/j/と発音され、《象鼻高山譯語》原本の音写担当者が蔵文 y の読書音を/j/と考えていたことも見て取れる。

表 4 の推定音はさらに精密な分析を必要とするが、少なくとも「書」の例などを考えると、音写漢字「日」に対応する音として、/j/とは異なる音価を推定しなければならないといえる。*z か*ʑ かはチベット系諸言語では方言区分を見るうえで重要な差異である（Suzuki 2022b）が、《象鼻高山譯語》に使用される音写漢字の音体系を推定する作業が必要である。加えて、《象鼻高山譯語》には蔵文 ya に対して、漢字音写に「哈」や「呵」が用いられている例がある。これも説明を与えるのに音写漢字の音体系を推定する作業が必要である。したがって、本稿では同文献に記録された形式の音価の確定には踏み込まない。

以上の蔵文 l, y についての音対応について、現代のチベット系諸言語のうち、松潘県、九寨溝県、ペマ語分布域およびその周辺に分布するものついて言語地図に表すと、図 3 のようになる[15]。地図上には、蔵文 l, y の音対応を組み合わせて記号化し、区別した。なお、各地点のデータすべてについて、語彙層の異なり（口語音、文語読書音など）のため、複数の音対応が認められる。以下の地図に反映される音形式は、蔵文 l については「道」（蔵文 lam）、「手」（蔵文 lag）に対応する初頭子音を、蔵文 y については「文字」（蔵文 yi ge/yig）、「軽い」（蔵文 yang）に対応する初頭子音の反映形とする。

[15] 地図化する際の資料は、杨（1995）[舟曲チベット語立節方言、新城子方言]、孙 等（2007）[ペマ語白馬方言、勿角方言、入貢山方言]、魏（2019）[ペマ語鉄楼強曲方言]を参照したほかは、筆者のフィールドワークで記録したものに基づく。ただし、先行研究における音韻分析では、ここで議論している蔵文 l に対応する/j/を/i/を第 1 要素とする二重母音と解釈しているが、/j/を意図しているものとして取り扱う。チベット系諸言語の音表記は、Suzuki（2016）の方針を踏まえる。



注：虎牙の形式は「j-z/ʑ」のように表記でき、白抜きの丸をベースとする記号を採用した。
図 3 ペマ語および同言語分布域の周辺のチベット系諸言語における蔵文 l, y の音対応

チベット系諸言語を見渡すと、铃木（2021）や Suzuki（2022a, b）で記述があるように、蔵文 l と y について前者が/j/に対応する変種では、多く後者が/j/以外の音と対応関係があり、《象鼻高山譯語》に記録された言語のほか、ペマ語や Khodpokhog チベット語でもあてはまる。この点で、類型的な近さの面では、《象鼻高山譯語》に記録された言語はペマ語や Khodpokhog チベット語との関連を認めてよいと考える。

3.2 一部の名詞における蔵文 ngan とされる形態素の付加

まず、西田・孫（1990：26）にある例「門」「歯」「男子」を含め、記録される言語形式に蔵文 ngan または ngag[16]、音写漢字に「哀」が現れる例を表５に掲げる。ただし、表４にあるような「書」に対応する音写漢字の「哀」は、異なる音節を反映した字と考えることが合理的だと考えられるため、ここでは除く。表５の「哀」は、対応する蔵文形式を踏まえ、*ŋɛ のような形式を推定できる。ここにまとめられた語形式は、正則の文語形式としては ngan に相当する音節を必要としないものである。

[16] ngag というつづりは、ngan の誤写であると考えられる。

表 5 《象鼻高山譯語》における蔵文 ngan が付される形式

《象鼻高山譯語》		
漢語見出し	蔵文形式	漢字音写
門	sgo ngag	惡哀
歯	so re	速哀里
男子	gyi ngan red	尼哀
父	pha ngan re	筏愛里
耳	sna ngan re	拿哀里
口	kha ngan re	哈哀里
鍋	zang ngan	若哀
肉	sha ngag	刹哀
茶	ca ngan	甲哀
布	ras re	勒哀
西番	pod red	布哀里

注意すべきは、「歯」「布」「西番」のように、《象鼻高山譯語》にある蔵文には ngan が書かれないが漢字音写には「哀」を含む例がいくつか見られることである。漢字音写は概して発音に忠実であったと考えられるため、音形式として存在した可能性が高い。また、当該音節が 1 例のみ「愛」で音写されている例（「父」）がある。

さて、蔵文 ngan はどういった機能を持っているのであろうか。《象鼻高山譯語》における漢字音写に「哀」を含む例は、「身体門」の項目に現れる頻度が有意に高い。ほかには「器用門」「飲食門」の項目に含まれる語が複数ある。この特徴について説明を与えられる可能性が高いのは、Tsering Samdrup and Suzuki（2019）がまとめるアムドチベット語における牧民の話す変種に認められる「謙譲表現」の体系である。この中では、話者または話者の所有物について、特定の否定的な語義をもつ形態素を名詞に後続させることによって、謙譲の意を表す（菊池 1994：221 における「謙譲語 B」に相当）派生が記述されている。その形態素の中に、蔵文 ngan「悪い」に由来する形式も含まれており、生産性も高い。

Tsering Samdrup and Suzuki（2021：229）では、20 世紀の現松潘県出身のチベット学者が記述したチベット文語作品に khang ngan「我が家（直訳：悪い家）」が用いられていると指摘している。本来、この種の謙譲表現は、システムとして牧畜民の話す言語体系を中心に備わっている一方、農民[17]の話す言語体系では存在しない（ゆえに謙譲語の意図さえも理解されない）と報告されているが、松潘県ではヒャルチベット語（話者は農民・定住民）に謙譲表現を使用する習慣がある。《象鼻高山譯語》に記録される言語がこのヒャルチベット語の特徴を反映している可能性は、その分布や話者の来歴を参考にすると、高く見積もられる。この推定が正しければ、同文献の記載が 18 世紀に謙譲表現のシステムが確立されていた証左であるとみなすことができ、意義深い点となる。

3.3 音訳に添えられる蔵文 red

先に示した表 3–5 の例の中に見えるように、《象鼻高山譯語》に記録される言語形式に蔵文 re や red が付される形式多く含まれる。それに対する分析は西田・孫（1990：26）の提示する通り、記録者が発話者の返答の最後に現れる判断動詞をも記録したためであるというのは、《白馬譯語》との並行性もあり、妥当と判断する。《象鼻高山譯語》と《白

[17] チベット文化圏では、厳密な意味での農民は少なく、農耕牧畜民（agro-pastoralist）として定住している人が多い（Tournadre and Suzuki 2023）。松潘県のヒャルチベット語話者は多くが農耕牧畜民である。

馬譯語》に顕著であるというのは、両者の記録対象言語の分布地域が同一の土司（龍安土司）の管轄であったこともあり、調査記録者が同一であったためという可能性がある。redが繋辞の機能を持つ動詞であると判別できないレベルの知識力で記録したのではないかと疑念を持つのは妥当であろう[18]。

さて、この点に問題とするべきは、判断動詞が蔵文で re や red と記される音特徴を持っていたという事実である。文語として存在する語形は red であるから、《象鼻高山譯語》に記録された言語体系では、re も red も近似した音声実現を示していることが推測される。また、判断動詞について蔵文 red に対応する語を用いる変種であるということも言える。この形式は、通例提題/陳述（factual/statemental）の証拠性を表す判断動詞である（Tournadre and Suzuki 2023, Suzuki 2023）。この特徴を考えるにあたって、周辺のチベット系諸言語ではどのような語形を用いるのか、図 4 に示す。

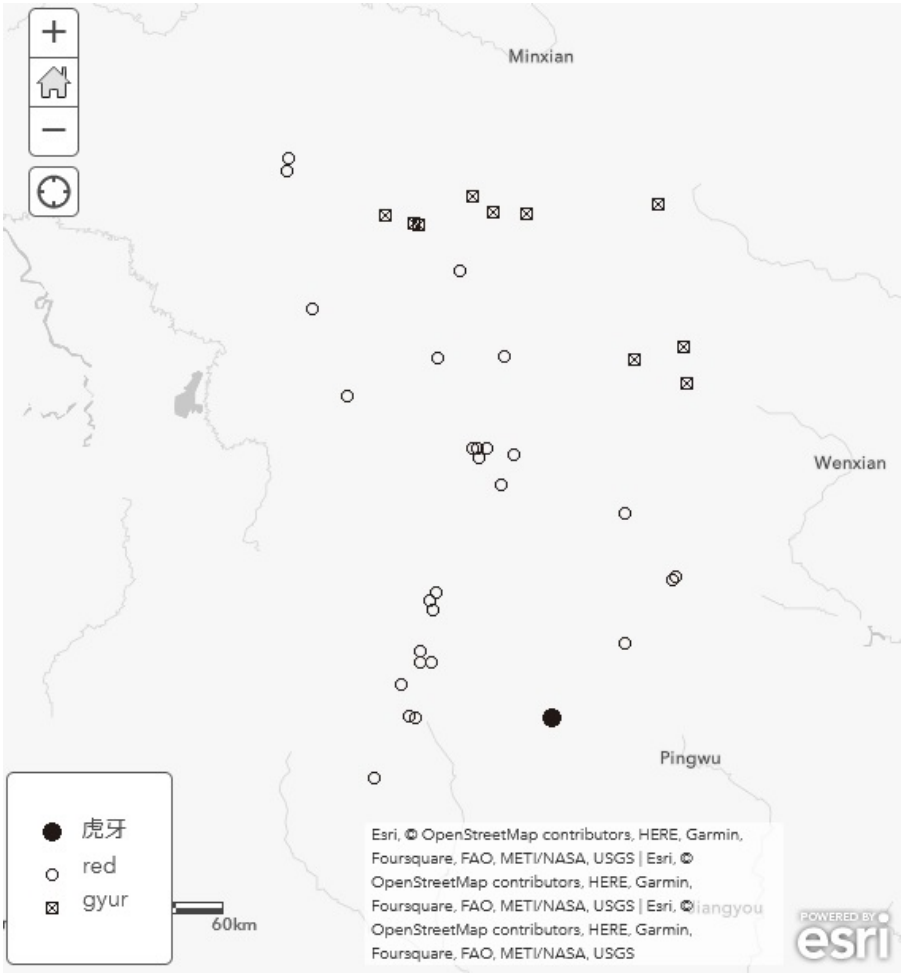


図 4 ペマ語および同言語分布域の周辺のチベット系諸言語における判断動詞（陳述証拠性）の形式

図 4 に見えるように、蔵文 red の対応形式は当該地域全体に分布する。ペマ語の北部で話される mBrugchu（舟曲）チベット語および Thewo-smad（下迭部）チベット語に異なる語根を用いることが確認されるが、《象鼻高山譯語》に記録された言語との地理的関連を

[18] 実際チベット系諸言語の語彙調査を行ってみると、形容詞を記録する際 red に対応する形式を含めることがあるが、名詞を記録するときに現れる red は判断動詞として同定し、記録時に省略する。

認めることはできない。したがって、《象鼻高山譯語》の記録時に蔵文 red 対応形式が現れること自体は、言語特徴の地理分布の観点から見て自然であるといえ、かつ当該地域におけるチベット系言語の話者の口承史とも矛盾しない。

3.4 その他の特徴

ここでは、西田・孫（1990）で《象鼻高山譯語》に記録された言語を同定する目的では取り立てて注目されていないがチベット系諸言語の観点から注目すべき音対応または語形式の特徴について、若干の補足を行う。取り上げる語について、表６に掲げる。そののち、１つずつ解説を与える。

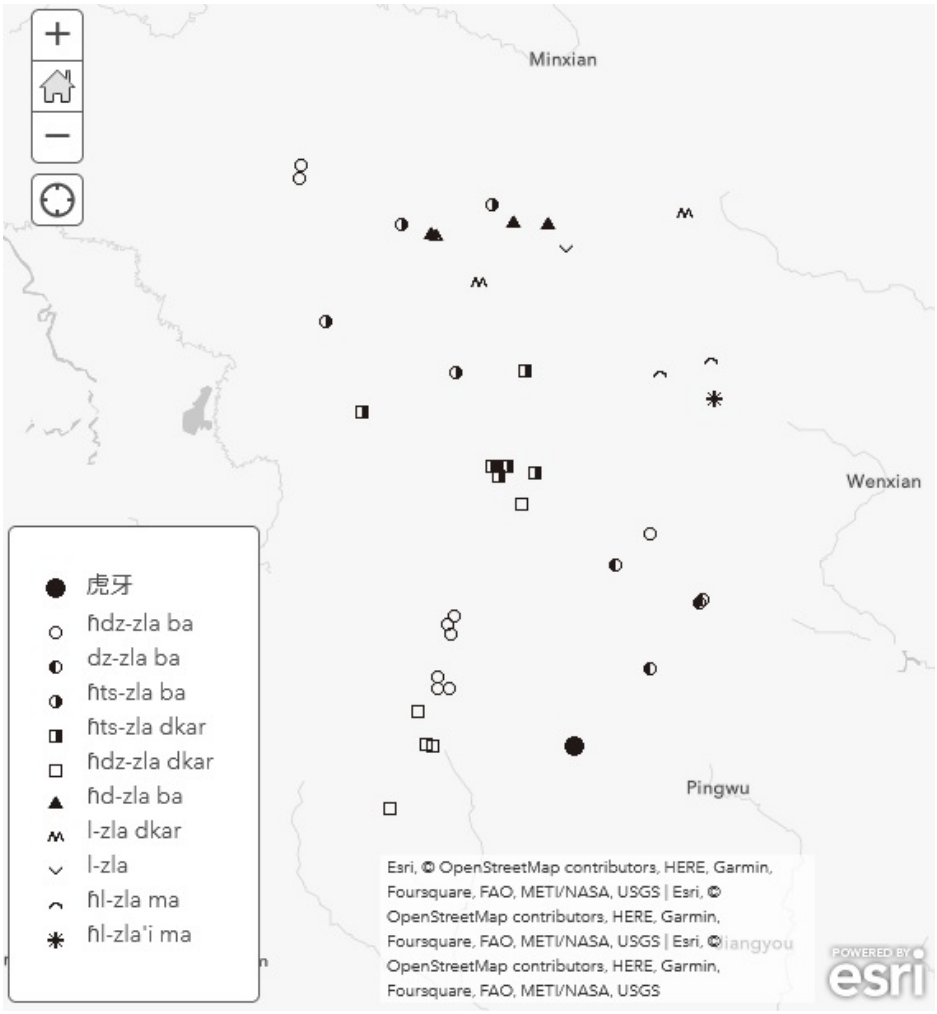
表 6 《象鼻高山譯語》におけるその他の特徴と着目点

《象鼻高山譯語》			音形式を推定する際の着目点
漢語見出し	蔵文形式	漢字音写	
月	zla ba	雜瓦	初頭子音に歯茎破擦音*ts/dz が推定されるか
明日	tho re red	時力里	語形が蔵文形式に対応するか
猪	phag	八	初頭子音に無気音*p が推定されるか
一	gcig	子	初頭子音に歯茎破擦音*ts が推定されるか
行	’gyo sdo	角獨	初頭子音に前部硬口蓋破擦音*dz が推定されるか

「月」は「天体の月」の語義を反映する形式を記録している。その形式については、音写漢字１文字目「雜」が蔵文 zla と対応するもので、その初頭子音（声母）部分の音対応が問題になる。音写漢字は歯茎破擦音*ts/dz を示唆している。周辺のチベット系諸言語の形式（図５）を踏まえると、*dz である可能性が高いが、無気の歯茎破擦音ということは、この例だけから推定できる。チベット系諸言語の中で、蔵文 zl の音対応は多様である（Tournadre and Suzuki 2023：248）ため、その中で無気の歯茎破擦音の形式を示すことは、《象鼻高山譯語》に記録された言語がその周辺部で話される諸方言との関連を示唆するものである。図５は周辺のチベット系諸言語ではどのような語形を用いるのかを示しているが、《象鼻高山譯語》に記録された言語の周辺に分布する諸言語では、「月（天体）」の初頭子音が無気の歯茎破擦音で実現されることが分かる。加えて、語形式全体を見たとき、《象鼻高山譯語》にある蔵文形式と漢字音写はともに蔵文 zla ba に対応する形式を示している。図５において、初頭子音が無気の歯茎破擦音であり、かつ語形式が蔵文 zla ba と対応するものを、丸をベースとする記号で表しているが、ちょうどペマ語とヒャルチベット語との共通性を見出すことができる。

「明日」は蔵文と漢字音写で異なる形式が記録されている。まず、蔵文形式は正則のつづりの tho rengs（語義は「黎明、夜明け」）に対応すると合理的に判断できる。この形式は、ヒャルチベット語や Khodpokhog チベット語に共通して見られ、かつ「明日」の意味で用いられる[19]。その第２音節末の鼻音要素は脱落し（鈴木 2010 参照）、《象鼻高山譯語》に記録された蔵文とよく対応する形式に見える。そうすると、漢字音写に何らかの誤記があったと考えるのが現実的で、たとえば、初頭の漢字は字体の類似する「吐」の誤写であった可能性を考えることで、当面の疑問は解消できるが、文献学的に証明することは困難である。

[19] なお、ペマ語（郭元方言）で「明日」は/ˊnɔ wɛ/といい、孙 等（2007：234）でも記述される３地点すべてで類似の形式が記録されている。これらは共通して蔵文 nangs par「朝に」の対応形式と考えられ、他のチベット系諸言語でも用いられる方言がある。なお、nangs par という蔵文形式は、川一《松潘譯語》に記載される形式と一致する。語形式の変遷があったかどうかを検証するよい素材であると考えるが、本稿の議論から外れるため、稿を改め議論したい。



注：虎牙の形式は「ts/dz-zla ba」のように表記でき、丸をベースとする記号を採用した。

図 5 ペマ語および同言語分布域の周辺のチベット系諸言語における「月（天体）」の初頭子音と語形式

「猪」は「ぶた」を表す。音写漢字の「八」は無気音の初頭子音を示唆しているが、チベット系諸言語では無気閉鎖音で実現される例は未見である。少なくとも、東チベット一帯におけるチベット系諸言語には確認されていない（Suzuki 2019）。ただし、羌系諸言語（Rmaic）やギャロン系諸言語（rGyalrongic）では「ぶた」の語形式は無声無気の/p/を初頭子音とする言語が複数認められる（黄 等 2019、Nagano and Prins 2013 など参照）。ただし、動物名の中で「ぶた」だけを他言語から借用する可能性は低いと見積もられる[20]。音写漢字の誤記または誤写も考えられ、有気音声母をもつ「扒」などを意図した可能性もある。

「一」は基数詞を記録しているものと考える。音写漢字の「子」は歯茎破擦音*ts の初頭子音を示唆している。まず、チベット系諸言語の「一」は大きく２つの語形式に分かれ、蔵文 gcig に対応するものと、口語に現れる*gtsig といった形式に対応するものであ

[20] ただし、チベット文化圏で話される非チベット系言語では、「ぶた」を周辺のチベット系諸言語から借用しているものもある（たとえば、タヤ・マ語；鈴木ほか 2021）。これは養豚の習慣とも関連していることが認められるため、家畜飼養の環境についての調査を通じて実態を確かめる必要がある。

る（完玛冷智 2006 参照）。前者であれば、前部硬口蓋破擦音を主とする音形式が予測されるが、チベット系諸言語の音対応全体を見ても歯茎破擦音とは対応しない。つまり、歯茎破擦音が現れる場合、それは蔵文 gcig に対応しないことを意味し、かつ両者の間には派生関係を認めない。さて、漢字音写の漢語音体系（西南官話四川方言）を考えると、前舌狭母音に前部硬口蓋破擦音が先行する構造は可能で、《象鼻高山譯語》の中にもその組み合わせが認められる。たとえば「狗」の項目に対する音写漢字「七」は、初頭子音が/tɕʰ/であることが合理的に示唆される[21]。このことから、「一」の音写漢字「子」は意図して歯茎破擦音*ts を表していると理解でき、その場合《象鼻高山譯語》に記録された言語における「一」は*tsi や*tsə といった音形式が推定できる。これを軸に考えると、*tsi/*tsə という形式は松潘県で話されるヒャルチベット語に一致する特徴（図 6 ；ヒャルチベット語各方言資料は鈴木 2007a, 2009a, 2010 参照）といえ、この言語群とのつながりを示唆する語形式であるといえる。

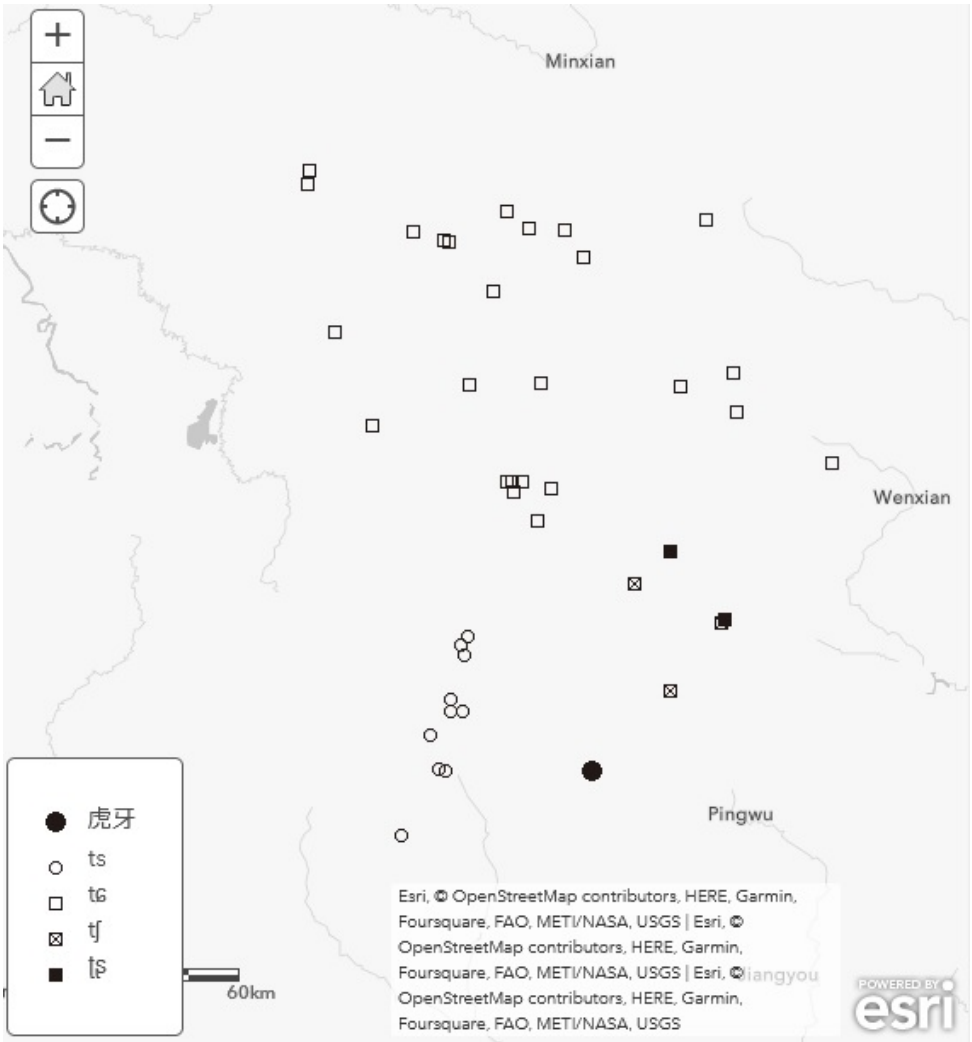


図 6 ペマ語および同言語分布域の周辺のチベット系諸言語における「一（基数）」の初頭子音

[21] 本来は漢字音写に用いられる漢字音を再構してから議論するべきものであるが、本稿の目的とする議論とは異なるため、稿を改めて行う。なお、チベット系諸言語について「犬」の語形式は例外もある（铃木 2022）。ただし本稿の文脈において、/tɕʰ/を初頭子音とすることは蓋然性が高い。

「行」は「行く」の語義を反映する形式を記録している。蔵文では'gro と書かれるが、《象鼻高山譯語》では'gyo とつづられる[22]。それに対応する音写漢字は「角」であり、四川方言では無声軟口蓋閉鎖音声母 k が期待されるところ、蔵文との対応関係から前部硬口蓋破擦音 tɕ の読みを採用し、有声音*dʑ（蔵文形式を重視すれば前鼻音つきの*^{N}dʑ）を推定するのが現実的であろう。周辺のチベット系諸言語では、この語に対して図 7 のような対応関係を示す。

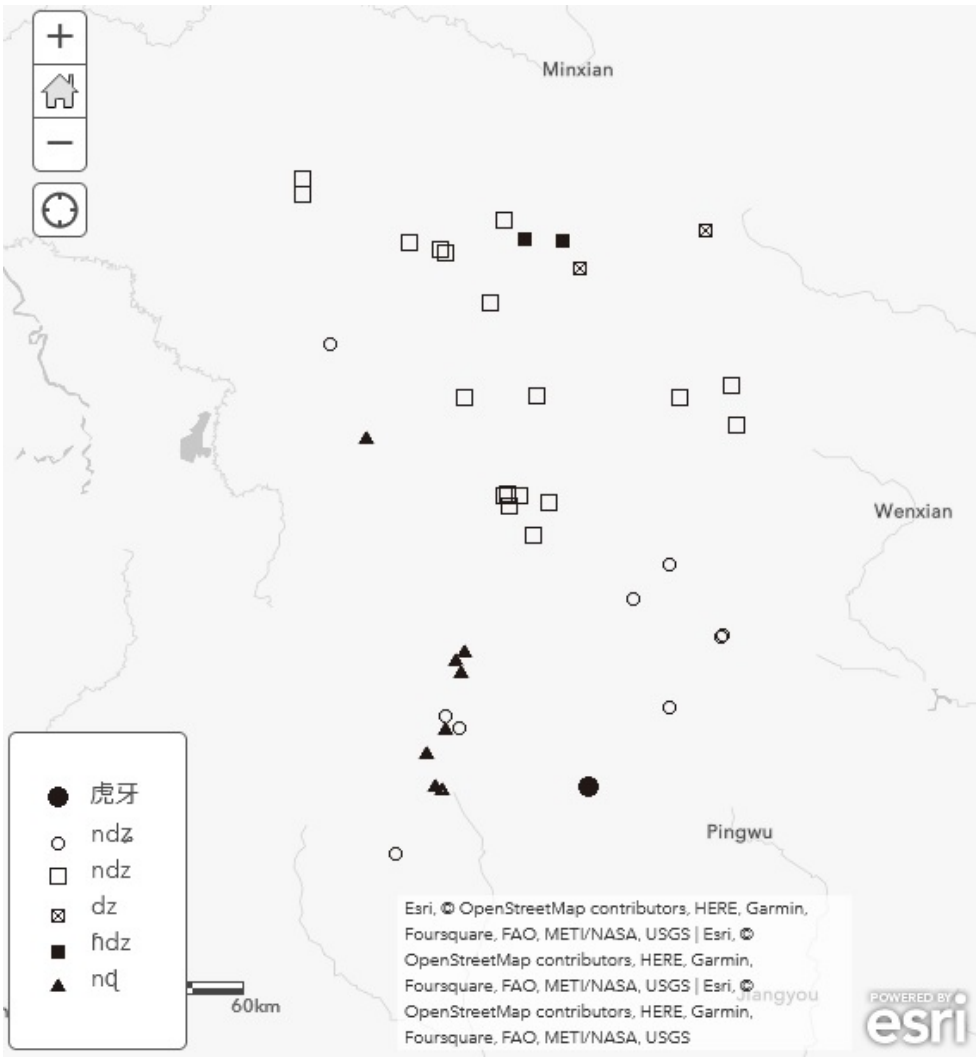


図 7 ペマ語および同言語分布域の周辺のチベット系諸言語における「歩く」（蔵文'gro）の初頭子音

いくつかの地点では、「行く、歩く」という語が例外的音対応を示す。たとえば、ヒャルチベット語で、数地点がそり舌音となっているが、他の kr, khr, gr を初頭子音字として

[22] 'gyo というつづりは正則の文語形式ではないものの、アムド地域における口語を意識した書き言葉、特に文学作品においては、このつづりを採用しているものがある（Tournadre and Suzuki 2023）。《象鼻高山譯語》の蔵文形式は、常に正則のつづりを採用しているわけではなく、加えて本稿で指摘したように誤写も複数認められる。しかしながら、記録対象の口語形式をよく反映した表記を採用していることもあり、決して無視することはできない。

もつ蔵文形式の音対応では、そり舌音ではなく前部硬口蓋破擦音になることが確認され、これを方言形式の音対応と考えることができる。すると、《象鼻高山譯語》の「行」は*dʑを初頭子音に含む形式であったと考えることが、地理的観点から見ても、話者の来歴に照らしても、合理的だと判断できる。

3.5 小結

以上、４つの特徴について考察を進めた。その結果は表７のように整理でき、総合して考えると、《象鼻高山譯語》に記録された言語はチベット系諸言語の１つであり、ペマ語、九寨溝県の Khodpokhog チベット語、および松潘県のヒャルチベット語の特徴を兼ね備えた、チベット系諸言語東部グループに属する変種を記録していると考えるのが妥当である。

表 7 《象鼻高山譯語》における特徴と周辺のチベット系諸言語の共通点

《象鼻高山譯語》にある現象	ペマ語	Khodpokhog チベット語	ヒャルチベット語
蔵文 l に/j/が対応する	該当	該当	n/a
蔵文 y に/z/または/ʑ/が対応する	/ʑ/	/z/	n/a
「月」（蔵文 zla ba）の初頭子音に/dz/が期待される	該当	/ts/	該当
「明日」に蔵文 tho rengs 対応形式が現れる	n/a	該当	該当
「一」（蔵文 gcig）の初頭子音に/ts/が期待される	n/a	n/a	該当
「行く」（蔵文'gro）の初頭子音に/dʑ/が期待される	該当	n/a	一部該当
謙譲表現と目される ngan を使用する	n/a	n/a	該当

ただし、表７で扱った特徴は、約 300 年という年代差を考慮していない。この間に音変化や語形式の入れ替わりが発生したであろうことも考慮に入れる必要がある。とはいえ、3.1 で扱った「蔵文 l に対応する/j/」という特徴は、その対応関係が発生した年代をより早い時期に設定することが現実的である（鈴木 2021 参照）。一方で、この特徴を共有しているというだけでは、言語区分を決定づけるものにならない。鈴木（2018）が指摘するように、むしろ２つ以上の異なるチベット系言語が混合した可能性もある。その場合、複数の言語が接触しているのが混合の成立背景にあると考えられる。２節でまとめた移民史が実情を反映しているとすると、ヒャルチベット語を基層とし、その上にペマ語と Khodpokhog チベット語が作用することで、表７のような言語特徴の混合が発生したという仮説を立ててみたい。

いずれにせよ、本稿で分析対象とした語彙形式は限られている。このため、今後校本作成を含め、《華夷譯語》研究における正統かつ手堅い手順に従って[23]分析を進めれば、《象鼻高山譯語》に記録された言語の特徴に一定の精度をもつ再構を行うことが可能であると言える。

4. まとめ

本稿では、まず《象鼻高山譯語》の記録地点および話者の歴史について、現代の地理情報を参照し、より明確な形で提示した。続いて、同文献に記録されたいくつかの語形式の音特徴・形態論的特徴を扱い、近隣のチベット系諸言語の資料とともに地図化して、その特徴を議論した。その結果、《象鼻高山譯語》に記録される言語の形式がヒャルチベ

[23] 理想的な手順としては、音写漢字の音体系の再構を行い、それから記録された言語の音形を再構するというものである。方法論としては、庄垣内（1984）が参考になるが、記録された言語の音形式が推定に困難がある複雑な事例には適用しがたいという問題もある。

ット語、九寨溝県の Khodpokhog チベット語、およびペマ語の各言語の特徴を示すことが分かった。本稿で扱った範囲においては、これ以上詳細な結論を出すことはできなかった。

本稿は、9 種ある丁種本《西番譯語》の中で最も研究の少なかった川二《象鼻高山譯語》について、若干ではあるが、先行研究にある言及より詳細な特徴を明らかにすることができた。諸資料の記述から考えると、《象鼻高山譯語》に記録された言語の後裔は、わずかながらもなお話されている可能性が高いと考えられる。今後の研究では、後裔にあたると目される現代の虎牙方言の記録も視野に入れ、丁種本《西番譯語》に適用可能な文献言語学的手続きによって、全面的に記録された言語の再構を目指していく必要がある。

〈参照文献〉

池田巧 2013.「《嘉絨譯語》概説」『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』153–163 頁。東京：好文出版。

池田巧 2019.「大谷大學所藏本《呂蘇譯語》について」『東方學報』94: 424–436 頁。doi: https://doi.org/10.14989/250687

太田斎 2008.「[資料]丁種西番訳語（川一）校本（稿）」『アジア言語論叢』7: 109–164 頁。URI: https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1154

菊地康人 1994.『敬語』東京：角川書店。

庄垣内正弘 1984.「『畏兀児館譯語』の研究---明代ウイグル口語の再構---」『内陸アジア言語の研究』1: 51–172 頁。URI: https://hdl.handle.net/11094/18589

鈴木博之 2007a.「川西民族走廊・チベット語方言研究」、京都大学博士論文。doi: https://doi.org/10.14989/doctor.k12734

鈴木博之 2007b.「丁種本《西番譯語》〈川六〉に記録される 18 世紀木坪チベット語の特徴」『内陸アジア言語の研究』XXII: 157–180 頁。URI: http://hdl.handle.net/11094/20648

鈴木博之 2007c.「丁種本《西番譯語》〈川九〉に記録される 18 世紀木里チベット語の特徴」福盛貴弘・遠藤光暁編『華夷訳語論文集』/『東ユーラシア言語研究 第 2 集』83–94 頁。東京：大東文化大学。

鈴木博之 2007d.「チベット語包座[Babzo]方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』74: 101–120. doi: https://doi.org/10.15026/42695

鈴木博之 2008.「九寨溝風景区のチベット語とペマ語をめぐる若干の問題」『アジア言語論叢』7: 91–107 頁。URI: https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1153

鈴木博之 2009a.「川西民族走廊・チベット語方言分類語彙集」長野泰彦編『チベット文化圏における言語基層の解明--チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読(No. 16102001) 研究成果報告書』2: i–xxii + 1–457 頁。国立民族学博物館。URI: http://hdl.handle.net/10502/4342

鈴木博之 2009b.「《西番譯語》〈川七〉18 世紀チベット語打箭爐方言の性格について」『京都大学言語学研究』28: 33–63 頁。doi: https://doi.org/10.14989/141799

鈴木博之 2010.「ヒャルチベット語松潘・大寨[Astong]方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』5: 117–155 頁。doi: https://doi.org/10.15026/64040

鈴木博之 2013.「蔵文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩[dGonpa]方言の特徴--舟曲県チベット語の概説を添えて--」『京都大学言語学研究』32: 1–35 頁。doi: https://doi.org/10.14989/182202

鈴木博之 2018.「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジ

ア・アフリカ言語文化研究』95: 5–63 頁。doi: https://doi.org/10.15026/92458
鈴木博之 2022.「下迭部チベット語阿夏['Azha]方言のチベット文語形式との音対応と語彙：迭部県のチベット系諸言語の概観とともに」『言語記述論集』14: 65–114 頁。URI: http://id.nii.ac.jp/1422/00004411/
鈴木博之、才譲三周、四郎翁姆 2021.「タヤ・マ(Drag-yab sMar)語巴俄(mBengo)方言の語彙資料（日英対照）」『言語記述論集』13: 189–213 頁。URI: http://id.nii.ac.jp/1422/00004151/
西田龍雄 1963.「十六世紀における西康省チベット語天全方言について：漢語・チベット語単語集いわゆる丙種本『西番館譯語』の研究」『京都大学文学部研究紀要』7: 85–174 頁。URI: https://hdl.handle.net/2433/72922
西田龍雄 1970.『西番館譯語の研究　チベット言語學序説』京都：松香堂。
西田龍雄 1973.『多續譯語の研究　新言語トス語の構造と系統』京都：松香堂。
西田龍雄・孫宏開 1990.『白馬譯語の研究　ペマ語の構造と系統』京都：松香堂。
松川節・三宅伸一郎 2015.『「華夷譯語（西番譯語四種　猓玀譯語一種)」影印と研究』京都：中西印刷。

池田巧 2014.《《嘉绒译语》研究：“声色门”及“身体门”校释》,《民族古籍研究》第 2 辑：19–30 页。
春花 2020.《论《西番译语》及《川番译语》编纂始末》,《藏学学刊》第 23(2)辑：105–121+266–267 页。
达瓦卓玛 2022.《《打箭炉译语》汉藏对译研究》,《中国藏学》第 6 期：174–189+220 页。
冯蒸 1981.《《华夷译语》调查记》,《文物》第 2 期：57–68 页。
华侃、尕藏他 1997.《藏语松潘话的音系和语音的历史演变》,《中国藏学》第 2 期：131–150 页。
黄成龙、王保锋、毛明军、张曦 2019.《四川松潘羌语》。北京：商务印书馆。
霍帆 2023.《《五音集字》与清后期四川文雅口音》,《南开语言学刊》第 2 期：29–35 页。
铃木博之 2013.《九寨沟口内外藏语语音面貌》,『アジア言語論叢』9：37–76 页。URI: http://id.nii.ac.jp/1085/00001318/
铃木博之 2015.《《天全译语》及《打箭炉译语》与当代木雅热岗藏语之关系》,《东方藏区诸语言研究》，成都：四川民族出版社，243–258 页。
铃木博之 2021.《从地理语言学的角度看云南藏语/l/及/j/的历史发展》，铃木博之、仓部庆太、远藤光晓（编）《中国语言地理研究论文集》，府中：东京外国语大学亚非言语文化研究所，21–38 页。doi: https://doi.org/10.15026/116769
铃木博之 2022.《滇川藏交界处藏语支语言中的“狗”——相关语音形式的地理语言学分析》，岩田礼教授荣休纪念论文集编纂委员会（编）《岩田礼教授荣休纪念论文集（上册）》，东京：日本地理语言学学会，253–263 页。doi: https://doi.org/10.5281/zenodo.6342364
刘辉强 2006.《藏彝走廊东部边缘地区的民族语群（ethnic language group）研究》，袁晓文、李锦（主编）《藏彝走廊东部边缘族群互动与发展》，北京：民族出版社，212–216 页。
聂鸿音、孙伯君 2010.《《西番译语》校录及汇编》。北京：社会科学文献出版社。
桑木旦 2002.《达布人的族属之见》，曾维益（编著）《白马藏族研究文集》，成都：四川民族研究所，131–133 页。
孙宏开、齐卡佳、刘光坤 2007.《白马语研究》。北京：民族出版社。
完玛冷智 2006.《藏语数词的语音变化》,《民族语文》第 4 期：39–40 页。

王振 2020a. 《嘉戎语东部方言的元音对应及其历史演变——基于清代《嘉戎译语》和现代方言材料的考察》,《民族语文》第 3 期：87–94 页。
王振 2020b. 《清代《嘉绒译语》藏文注音的规律和性质》,《藏学学刊》第 2 期：122–140+267 页。
魏琳 2019. 《甘肃文县白马语》。北京：商务印书馆。
杨士宏 1995. 《一河两江流域藏语方言汇要》。兰州：甘肃民族出版社。
曾维益 1993. 《虎牙藏族》。成都：四川省民族研究所。
曾维益 1997. 《色尔藏族》。平武：四川省格萨尔办公室。
曾维益 2000. 《龙安土司》。成都：四川省民族研究所。
张荣主（主编）2017. 《故宫博物院藏乾隆年编华夷译语》全 18 册。北京：故宫出版社。

Chirkova, Katia. 2014. The Duoxu language and the Ersu-Lizu-Duoxu relationship. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37(1): 104–146. doi: https://doi.org/10.1075/ltba.37.1.04chi
Nagano, Yasuhiko and Marielle Prins. 2013. rGyalrongic languages database. Online: https://htq.minpaku.ac.jp/databases/rGyalrong/
de Nebesky-Wojkowitz, René. 1956. *Oracles and demons of Tibet: The cult and iconography of the Tibetan protective deities*. ’s-Gravenhage: Mouton.
Suzuki, Hiroyuki. 2008. Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l’est d’Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31(1): 85–108. doi: https://doi.org/10.15144/LTBA-31.1.85
Suzuki, Hiroyuki. 2009. Tibetan dialects spoken in Shar khog and Khod po khog. *EAST and WEST* 59(1–4): 273–283. URI: http://www.jstor.org/stable/29757812
Suzuki, Hiroyuki. 2016. In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: Towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10: 99–125. URI: http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/
Suzuki, Hiroyuki. 2019. How Tibetans classify pigs in their languages in the eastern Tibetosphere: Revisiting the pig issue through geolinguistics. In Hiroyuki Suzuki, Keita Kurabe, and Mitsuaki Endo (eds.) *Papers from the Workshop “Phylogeny, Migration, and Contact of East and Southeast Asian Languages and Human Groups”*, 40–53. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. URI: https://publication.aa-ken.jp/sag_mono7_phylogeny_dispersion_contact_2019.pdf
Suzuki, Hiroyuki. 2022a. *Geolinguistics in the eastern Tibetosphere: An introduction*. Tokyo: Geolinguistic Society of Japan. doi: https://doi.org/10.5281/zenodo.5989176
Suzuki, Hiroyuki. 2022b. The dialectal affiliation of Tibetic varieties in gYagrwa within Yunnan Tibetan. *Kyoto University Linguistic Research* 41: 43–68. doi: https://doi.org/10.14989/281541
Suzuki, Hiroyuki. 2023. Geolinguistic analysis of the word form derived from *red* in Tibetic languages in Khams and Amdo. In Trịnh, Cẩm Lan, Trần Thị Hồng Hạnh, Hiroyuki Suzuki, and Mitsuaki Endo (eds.) *Proceedings of the Fifth International Conference on Asian Geolinguistics*, 62–73. Tokyo: Geolinguistic Society of Japan. doi: https://doi.org/10.5281/zenodo.8374577
Tournadre, Nicolas. 2014. The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith and Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan linguistics: Historical and descriptive linguistics of the Himalayan area*. Berlin: Walter de Gruyter. 105–129. doi:

https://doi.org/10.1515/9783110310832

Tournadre, Nicolas and Hiroyuki Suzuki. 2023. *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan*. Villejuif: LACITO Publications. doi: https://doi.org/10.5281/zenodo.10026628

Tsering Samdrup and Hiroyuki Suzuki. 2019. Humilifics in Mabzhi pastoralist speech of Amdo Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 42(2): 222–259. doi: https://doi.org/10.1075/ltba.17008.sam

Tsering Samdrup and Hiroyuki Suzuki. 2021. Politeness strategies, language standardisation, and language purism in Amdo Tibetan. In Nicola McLelland and Hui Zhao (eds.) *Language standardization and language variation in multilingual contexts - Asian perspectives*, 223–240. Bristol: Multilingual Matters. doi: https://doi.org/10.21832/9781800411562-014